

66. 古文書も民具も歴史の語り手

鳥飼の古文書事情を鳥飼の座談会で聞いた。いま貴重資料の古文書も一昔前はただの反故だった。民具もまた歴史を語る貴重な資料、収集・保存はこれからの課題だ。

鳥飼上のヒョウサツバ

鳥飼上の青年会場の辺りは高槻藩の支配の拠点で、堤防わきの 200～300 坪の広場に鳥飼全体の年貢米を集め、武士が出張してきて収納に当たった。その米は百姓がオウコで担いで高槻までもって行った。米 2 俵で 140kg、運搬は百姓の義務だったという。広場にはヒョウサツバ（高札場）があった。会場の隣には戦前までゴグラ（郷蔵）があった。

郷蔵にぎっしり古文書

ゴグラには 2 尺×2 尺×5 尺（60×60×150cm）ほどの長持がいくつもあり、古文書がぎっしり詰まっていた。多くは高槻藩の年貢帳で、中には水争いの文書や取決めがあり、どこそこの家の先祖とわかる人達が署名し、ハンコをついているものもあった。

古文書を焼き捨てる

郷蔵は祭りの道具入れにもなっていて、山車などをしまう際には古文書で巻き付けて保管した。役場では古文書の紙でコヨリを作って書類を綴じた。昭和 18 年（1943）頃の雨の日、ゴグラは音もなく崩れた。村総出で柱や壁組みを淀川の州に運び、古文書も一緒に燃やした。役に立つ資料もあるんじゃないかと思ったが、青年の身で言いだせなかった。

同行報恩講に控え帳が

村にはカイチという 30 軒ほどの自治組織があり、ドウギョウボンコ（同行報恩講）を勤めている。いくつかの組では江戸時代以来の報恩講の控え帳を伝えており、今年担当のものが書き継いで来年の当番に渡すという。これが村として伝える古文書である。

民具も歴史を語る

民具から祖父母の時代の暮らしがわかる……これは常識、だが民具はもっともっと昔、古墳時代や奈良・平安時代のことまでも語ってくれる。形や呼称が古代の情報をなお伝えていることがあるからだ。これが古文書とは一味違う民具の強さなのだ。

A は 1993 年兵庫県で発掘された飛鳥時代のカラスキで、B は摂津市の民具。長床藜の基本形は今日まで変わらない。カラスキという呼称もこの時代からだろう。

C は高槻市の奈良時代の馬鍬、D は摂津の民具のウマガワ。

E は福島県会津若松市で近年発掘された平安時代の田下駄で、F は摂津市の板ナンバ。杵でかかとを受ける方式は 1000 年来変わっていない。

